



## 会長就任後8ヶ月を振り返って

辻 康子



平成7年5月私は震災による亀裂の入ったデコボコ道で足を骨折した。6月の会長就任は松葉杖をつき、リュックを背負っての非常に多難な出発であった。その後も骨折に続く腰痛に悩まされ“会長職は荷が重すぎる”との声なき声ではないかと苦悩の日々が続いた。肉体的苦痛に嘔まれ悶々としながらも、次々とこなしていかなければならない事が山積していた。クラブ長期ビジョン、2年間の具体的な活動、目標などの話し合い、予算案編成、各委員会開催など新執行部に課された体制作りのための会合は頻繁に開かれ、それらにまつわる書類作成にもかなりの時間が費やされた。

就任後ひと月余り経った7月初旬、オルガンの巨匠サットマリー氏のコンサート計画が大阪I ゾンタクラブとの共催という形で急浮上した。願ってもない天から降って湧いたような話。例会でイベント開催が承認され、いざエンジンスタートとなるも、新執行部スタート直後のあまりに大きなホールでのイベントに測り知れない不安が募って

る。しかし計画はどんどん具体化し、田中(茂)さんを実行委員長として前向きに挑戦することになった。10月25日コンサート当日、ホールは満席状態のいい雰囲気の中でのいい演奏で、ほっと肩の荷を下ろす。いろいろな形でお世話になりご協力いただいた方々に、心から感謝申し上げた次第である。

この8ヶ月を振り返って、会員の方々の温かいご支援とご協力、そして家族の理解と協力があればこそ、ここまで夢中で走ってこれたのだと思う。和歌山チャーターナイト、徳島、京都I、福井それぞれの周年行事、地区大会など対外的にも非常に忙しいゾントライフであったし、又この4月からもチャーターナイト、エリアミーティング、世界大会など行事が目白押しである。日本のゾンタがどんどん拡大し変革していく中で、一人でも多くの会員が積極的にゾンタ活動に参加し、より深い理解と親睦を得られると同時に、あまり無理をせず息の長い活動を続けられるようにと願っている。



名古屋地区大会に参加して

辻 康子



国際ゾンタ26地区第3回地区大会が平成7年11月10日から12日まで、名古屋キャッスルホテルで開催された。“未来につなごう—女性の健康・人権・世界の調和”のテーマの下、ショランケ国際会長初め、エリアI（日本）426名、エリアII（台湾）96名、エリアIII（韓国）70名、総勢593名のゾンシャンが一堂に会したのである。

開会式に先だって国際会長とクラブ会長の昼食会が開かれ、ショランケ会長は、95年9月の北京女性会議の報告をされた。ゾンタは“国連、NGO、21世紀に向けての女性のエンパワーメント”という発表をし、非常に高い評価を受けた由、会長報告のあと質疑応答の時間も持たれた。

開会式では板東ガバナーの開会宣言、ゾンタソング斉唱などに続きクラブ点呼が行われた。中国服、チマ・チョゴリ、和服、それぞれの民族衣装を身にまとったゾンシャン達の華やかな風景である。WHO事務総長中島宏博士の基調講演、並びにショランケ会長との公開対談のあと、アメリカ・イアハート奨学金贈呈式が行われ、名古屋大学航空工科大学院生松岡美和さんに授与された。開会式に続きレセプションが行われた。

大会2日目朝一番に、ここ2年間の物故者のメモリアル・サービスが執り行われ、引き続き第一回ビジネス・ミーティングが始まった。大会プログラムの発表、国際会長スピーチ、その他諸々の報告を受け、地区、指名委員の立候補演説が行われた。立候補者達は一人3分の制限時間目いっぱい自分のビジョンを、予め準備した英文原稿でアピールする。中には時間オーバーでベルを鳴らされても、熱っぽく自分の考えを訴え続ける人もいた。演説直後、デリゲート、地区役員による投票が厳正に行われた。午後はワー

クショップ、夜はアジアナイトと続く。

大会最終日、第2回ビジネス・ミーティング。各エリア・ディレクター、7人の地区委員長の報告を英語で受ける。昨日の選挙結果、ワークショップの報告のあと、議案の採決に移った。予め各クラブで審議してきた案を、デリゲートがイエス、ノーカードで意志表示をする。地区費は年間8ドルから10ドルに値上げ、地区大会分担金は2年で2ドルから毎年10ドルに値上げと決まった。その他、核実験反対と女性の健康に関する決議文が採択され、国際ゾンタへ提出されることとなった。エリアIの分割については、エリア・ミーティングでの討議に持ち越された。

地区大会を立派に準備・運営された地区役員の方々と初め、ホストを務められた名古屋ゾンタクラブの方々には、心から敬意と謝意を申し述べたい。ただし残念に思ったことは、参加者の7割強が日本人である地区大会で日本人が慣れない英語で発表しなければならなかったことである。日本人は日本語で発表し、同時通訳を英語にしたらコミュニケーションがより深まったのではないだろうか。もう一点はビジネス・ミーティングの時間配分である。2日目はワークショップからアジアナイトまでに時間的余裕があったのに、3日目の審議事項には随分時間がかかり、終了予定時刻を相当オーバーしてしまったことは、大会最後にして残念なことであった。

地区大会は我々クラブにとって初めての経験で、参加された会員はゾンタの組織をよりよく理解でき、身近に感じられたことと思う。

中嶋 宏WHO事務総長の基調講演、と国際ゾンタ会長との公開対談

宮本 典子



“未来につなごう—女性の健康、人権、世界の調和”という大会テーマに基づき今回、国連機関の一つWHO（世界保健機構）の事務総長として活躍されている中嶋宏博士の御講演をいただいたことはゾンシャンとして非常に意義あるものであった。すべての人に健康を、というWHOの目標はまず女性の健康への権利が達成されねばならず、女性の権利は人間の権利であり、この目標の達成は世界調和（グローバルハーモニー）達成という、国連の目標（ゾンタの目標でもある）ときってもきれない関係にあるからである。

講演ではまずWHOの最近の活動について紹介された。1978年から女性には妊娠中、出産、出産後にトレーニン

グを受けた人によるケアが受けられるようにし、破傷風、ジフテリアのワクチンの接種、小児麻痺のワクチン接種ではすでに世界中でごく一部にしか見られなくなり、2000年頃にはなくなるものもあるだろうとのことであった。途上国の安全な水道の設備なども少しずつ進んでいるとのことであった。しかしまだ先進国と途上国の格差は大きく出産における母親の死亡率はアフリカで十万人あたり630、アジアで380、オセアニアで300、旧ソ連で45、と日本などではまれな出産関連の死亡がいぜん多い。また20歳未満の結婚、出産も（70年代に比べ）80年代のデータではイタリアや北アメリカでは改善されているもののフィリピンや

南アフリカのマラウイなど依然60%近く、地域格差が大きい。ほしくない妊娠を避けたい、避妊したいという要望は、アフリカでは77%に上る。栄養面でも鉄不足、ビタミンA不足などが目立っている。

成人（15～44歳）の死亡原因を見ると、妊娠あるいは分娩関連が女性に多いのは当然であるが、HIV（エイズ）、STD（性感染症）も女性に多く、男性の殺人、事故、アルコールと対比して問題である。

現在、介添えが付かない出産などにより、1500万の出産のうち、主に途上国で400万の新生児が死亡、また50万人の母親が死んでいる。2億人の女性が妊娠し、5000万が結局出産しないが、2000万は安全でない中絶を受けている。STDも1億6500万件もあるが女性は治せないことが多い。

癌については先進国の女性では乳ガンの率が高いが、現在では直腸癌や胃ガンなど男女同じものに代わってきている。一方開発国ではまだ51%が、先進国では予防できる子宮頸部癌で死んでいる。肺ガンなど喫煙に関連した疾病の男性の死亡率は、このところずっと減っているが女性では増えてきている。タバコ産業は最近女性をターゲットにしたマーケット開発をしているが気をつけなければならない。

女性に対する暴力については、その多くが家庭内暴力で、20～50%がパートナーによるものと考えられる。南米の警察病院での統計でも家庭内暴力の1/3が女性。パプアニューギニアでは結婚女性の2分の1が暴力をうけているが5分の1しか病院に行っていない。エジプトでも外傷の25%が家庭内暴力、少女の15%が性的体験を強制された。カナダでも20%が殴られた経験を持つ。

健康関連のサービスの受け方についても男女間に格差がある。食料のあたり方、安全な住まいなども。

どうしたら女性の健康が改善されるかということを考えて、意志決定のできる地位に女性が座れるかどうかが大切である。

ゾンタの目標の一つに健康が取り上げられたとき、不明な私は、今更何故健康？と不思議に思いました。なぜなら生物では一般に雌の方が生き残る確率が高いように作られている。雌の方が太っているし、寿命も長し、日本でも財布を握っている奥さんは自分の食べたいものを食べ、問題になっているストレスも少ない。

中嶋先生の豊富なデータに基づくお話をきいて、いま、女性と健康の問題を取り上げることがどんなに必要かよくわかったように思います。

フォラケ、ショランケ国際会長と中嶋WHO事務総長との公開対談

ゾンタはNGOの中でも国際的ないくつかの政府機関の話にも参加して意見を出せる地位にあり今後どのようなニーズがあるか、女性の立場から役割を果たしてゆきたい。今は、とくに少女について考えねばならないと思っている。

アジアでは少女の数自体が減っている。ある国では統計的に見ても男女の比率が変わってきている。一人っ子政策を採っている国のみならず日本でも起こっていることである。多くのアジアの国で男性を、ということがいわれる。一人っ子が多くなるとこのアンバランスはますますその傾向を強める。少女は教育、ヘルスケアどちらも受ける機会が少なく、また強制的に労働させられる率が高い。また暴力の被害者となる率も高い。開発途上国や移民だけでなく、ヨーロッパでも起こっていることである。先進国も協力して情報が必要である。

その他麻薬や医薬の輸出や援助の問題、タバコの問題、エイズと商業的SEX 産業との関わり、等お話しつきず、リプロダクティブヘルスとしては女性全体の水準を上げることが是非とも必要ということでした。

今回はじめて同時通訳というものをまじめに体験し



（京都国際会議場で以前経験した学術講演会とはとても聞けたものではありませんでした）、なかなかわかりやすくよかったですと思いました。でも中嶋先生が日本の方ですから、日本語で講演されて英語の同時通訳があった方がよかったですのではないかと思います。それも、韓国、台湾の方への通訳があったのならまだしもですが。そして、私たちももっと韓国語や中国語/台湾語を勉強しなくてはならないと思いました。

ワークショップA 健康 21世紀の環境と女性の健康

西村 博子



北京で開かれた世界女性会議での「リプロダクティブ・ヘルス&ライツ」という女性の健康と人権の問題は、今世界的課題として大きく議論されています。

仙台ゾンタクラブ長池さんは、産婦人科医師として50年余の仕事を通じて、生命の誕生につながる「妊娠」という場面での関わりの中からの貴重なプレゼンテーションをしてくださいました。(以下一部抜粋)

喜びの妊娠、望まれない妊娠そして人口妊娠中絶の問題は、女性の固有の性の基本的課題であり、その背景には社会環境の問題が大きくあります。世界の人口は、今や57億7千万といわれており、その大部分を発展途上国が占めています。妊産婦死亡率は、今日先進国といわれる諸国では、人口10万に対して平均10%以下であり、40年前に比べると激減しています。それは、経済的発展と医学の進歩、そして女性の教育の普及の結果です。しかし、今もなお世界

で約50万の女性が妊娠・出産のために死亡しています。貧困のために食料がなく、栄養不足に陥り、衛生状態が悪いため病気や過労による低体重児や未熟児が生まれたり、せっかく生まれた子供も母子共に栄養不足で死亡することが多いという。発展途上国が貧困という問題を解決していくためには、経済発展が必要とされるが、そうすることが工業化をとめない、自然や環境を破壊することにつながります。社会環境と自然環境は、互いに深く関わります。一方、地球にやさしい環境作りをするため、環境との共存を考え、ライフスタイルを変化させようという、Eco-New Lifeという新しいコンセプトも提唱されました。

いずれにせよ私達は環境問題にもっともっと発言していくことが求められています。かざられた地域へのサポート体制も含めて。

特集 国際ゾンタ26地区 第3回地区大会名古屋

ワークショップB 人権 世界の調和は人権の尊重から

久岡 眞佐代



パネリスト清野幾久子さん(札幌I所属、札幌大学で憲法担当)の「高齢化社会における女性の人権」を紹介しします。

「高齢化問題は女性問題」と言われています。特に、日本などのアジアの親子観では、子供が親の面倒を見るのは当然ですから、高齢者介護とは、「家族介護」「在宅介護」を意味します。そして実際には、妻(嫁)が仕事を辞めて介護に専念せざるを得ず、そのため女性の年金額が下がり女性自身の老後の自立を一層困難にし、ここに高齢者問題は女性の人権に大きく影響する問題となってきます。

ヨーロッパでは親が子供と一緒に老後を過ごすという意識が薄く、嫁がしたくない義理の親の介護を強制されるのは、介護者、介護される者の双方にとって不幸であり、それだけで人権問題が生じていると言います。ヨーロッパでは、社会保障制度が先に発達しましたが、そこでも女性の

年金の低さ、老後の生活費の問題などが指摘されています。

最後に、清野さんは、ゾンシャン達が「女性の人権と家族」をキーワードとして互いに助け合って、女性の労働権、年金が保障された高齢者社会に合った新しいシステムを作っていくことを提言しています。

今、日本は、世界に類を見ない速さで高齢化と少子化が進んでいます。2025年には人口の4人に1人が高齢者だそうです。私達は親を介護しますが、私達自身が寝たきりや痴呆症になったとき、私達の子供に頼れる社会(不景気、増税)ではないような気がします。高齢者介護は、会員共通の課題として互いに情報を交換し、そして、現在進められている行政による在宅介護サービスや老人施設の実態について、大いに関心を持っていきたいと思えます。

特集 国際ゾンタ26地区 第3回地区大会名古屋

思い出のアジアナイト

徳光 正子



ゾンタの組織そのものもまだはっきりと理解できていない私が、朝からのミーティングで普段は余り縁のない英語やら、同時通訳やらの場面に置かれると、少しばかり国際クラブの仲間入りをした緊張感と同時に、本音で

はいささかくたびれてしまった。そんな2日目の夜のアジアナイト。佐藤千代子大会委員長の開会の言葉に続いて、Amy Lai 副ガバナーのご挨拶、原菊子エリアディレクターの乾杯で楽し

い夕べは始まった。衣装替えをして集まったメンバー達は、それぞれのお国のコスチュームで、華やかで艶やかであった。

偶然私と田中淑子さんとは同じテーブルだったのですが、お隣の韓国の方は、日本語はもちろん英語も話せない方でしたが、幸いなことに田中さんが、韓国語を話して下さり、驚いたり喜んだり。この方は絵描きさんで、水墨画風のデザインのチョゴリはご自分が描かれたと伺って驚いた。ショランケ国際会長のエキゾチックな装いは、とてもチャミングで魅力的でした。アトラクションは、滝本恭史演奏のシンセサイザー。ロングヘアに派手な衣装、しかも厚かましい表情と語りでステージに登場した彼の姿に、正直言って、一瞬戸惑いを覚えた。し

かし、一つ間違えばきわどい様なユニークで楽しいおしゃべりと素晴らしい演奏に、たちまち圧倒されてしまった。たった一人でこんなにも多くの演奏が可能なのかと、シンセサイザーの世界と彼のエンターテイメントぶりに魅了されてしまったのである。オープニングの曲は、アフリカ民族音楽から、韓国のアリラン、中国の古典と、旅人をもてなす気配りも大したものだった。日本曲のザ民謡メドレーでは、阿波踊りが飛び出し、徳島のメンバーはもちろん、国際会長はじめ、台湾、韓国の方々も一緒になって踊りの輪が場内一杯に広がった。いつの間にか皆の心の中が熱くなって、心地好い興奮を覚えた。老いも若きも、国の違いを越えて、音楽は人の心をつなげてくれるものなんですね。楽しい夕べでした。

## 報告 大阪I・IIゾンタクラブ共催 阪神大震災チャリティコンサート

ジグモンド・サットマリー、オルガン・リサイタル 1995年10月25日(水) ザ・シンフォニーホール

企画実行委員長

田中 茂美



幸いリサイタルは「良い演奏」「良いホール」「良い天候」に恵まれ満場のお客様をお迎えすることができた。更に震災に遭われた方々約600名弱をお招きさせて頂き、喜んで頂けたことは私達にとり何よりも嬉しく、これも皆様方のご厚情と日頃よりの温かいご支援のお陰と感謝している。特に当大阪IIゾンタクラブにおいては、わずか26名の会員にて興行的にみても予想以上のよい結果を得られたのは、一同が労を惜しまず、チケットの販売や雑多な責務にも協力して下さった故の事であり、その一員であることを改めて誇りに感じている。深謝を込めて、以下、不十分ではあるが、経過を含めてご報告させて頂く。

### 1) チャリティーイベントがサットマリー・オルガンリサイタルになった経緯

6月の企画・女性の地位委員会にて、会員の皆様方の「ゾンタの意義と存在をアピールできるイベントを催したい」という要望を協議する中に、宮本典子会員の「秋にオルガンコンサートをしては？」というご意見があった。が、この時は、「パイプオルガンは宗教音楽」の先入観が皆にあり、他の奏者・演者選びをしていたのであるが、いずれも現実味の乏しいものであった。ジグモンド・サットマリー氏が私達には不釣合な程、名実共に音楽界で力のある方でおられることは、それから2~3週間後宮本会員からお話を伺って初めて知ったことであった。10月に東京公演のためドイツから招聘され来日される事。震災により1年前から予定していた宝塚ルナホール・甲南女子大ホールでのリサイタルが中止になった事。宮本会



アンコール曲のクライスラーの名曲を聴きながら、私は胸にしみ入るこの演奏の光景、この音色を忘れることはないだろうと思った。万感の思いとはこの時の様なものだろうか、ふと思うことがある。先般、シンフォニーホールにてサットマリー・オルガンリサイタルが大阪Iゾンタクラブとの共催にて催された時の私の思いである。若くのびやかなバイオリンを奏するアニコ・サットマリーとあくまでも力強くぬくもりのある巨匠・ジグモンド・サットマリーの父の情愛のこもったオルガン伴奏は、このリサイタルの「チャリティー」の意義を越えて、親と子の「愛」を聴く者に感じさせてくれた。荘重で感動的な演奏は聴く者の心に慰めと癒しを与え「愛」で満たしてくれた。約2時間の演奏は短くさえ感じられた。と同時に、この日に至るまでの色々なできごとが思い出され肩の荷が消えた思いがした。関わり下さった方々も同様の思いであつたらう。

員の親友でもあるサットマリー夫人のご実家が神戸にあり、ご親族も被災され、痛ましい状況に何とか手を差し延べたいと思っておられる事。よって大阪で公演できるのであれば、特に被災された方々を慰労できるのならば協力させて頂く、等々のお話しをお伺いした。開催できればゾンタクラブにとっても願ってもないお話しと思ひ、早速シンフォニーホール、いずみホールを何度も訪問し、事務局の方にホールの使用と音楽会を主催するについての留意する諸点等を細かくご教示頂いた。

偶然にもシンフォニーホールが10月25日のみ空いており、サットマリー氏も多忙な来日予定の中、10月25日のリサイタルを快くお引き受けくださり、オルガンリサイタルが現実味のあるものとなったのである。

#### 2) 大阪Iゾンタクラブに共催をお願いした経緯

わずか26名の会員の力を尽くしてもシンフォニーホールの客席を埋めるには負担が重すぎた。対して大阪Iゾンタクラブは歴史も経験もあり、規模も私達の2倍の会員数を有し、何といたって親クラブである。協力が得られれば、単独では困難でも共催なら成功する可能性も大であろうと思われた。チケットの販売・労力も互いに対等に申し合い、収益も対等に折半し、公平を期するという条件で大阪Iゾンタ・大阪IIゾンタクラブ共に会員の方々の了承を得ることができたのは7月初旬のことである。その後互いに実行委員が寄り合い、相談を重ねた。その都度、当クラブの社長、Iクラブの田中副会長が各クラブ内での意見の調整やとりまとめにご尽力下さったことは今でも忘れられない。

#### 3) サットマリー氏からの支援

このリサイタルのために新曲「君が代のテーマによる変奏曲」を自ら作曲して下さい、オルガンになじみの少ない聴衆のために、鎮魂をテーマに、わかり易いメロディーの名曲を選曲の上プログラムして下さい。また、バイオリニストの愛嬢アニコ・サットマリーと、初めてという共演を4曲も組んで下さり、ドイツでの演奏会やフ

ライブルク音大での多忙な仕事の合間に親子揃って猛練習をして下さった。そのハーモニーの美しさは当日私達の胸に響き、父娘に寄り添い支える夫人の姿は家族のありようを私達に訴えた。

更に大阪コンサート協会をご紹介下さり、担当の方が親身に当日に至るまでお世話して下さい、解説者の紹介や、チケットの行方まで心配して頂いた。一面識もない私達に誠に真心のこもった、言葉で言い尽くせぬ支援を氏、自ら与えて下さったのである。幸運であったと言える。

#### 4) チャリティ結果

来場者総数はご招待を含めて1575名であった。被災された阪神地区の方々590名を無料ご招待し、兵庫県を通じて震災義援金として50万円寄贈することができた。会員の協力により多くのチケットを販売することができたことだけでなく、関係者の方々の温かいお心遣いも「良い結果」を支える柱となってくれたと感謝している。

シンフォニーホールがご好意により、借り上げ練習代金をサービスして下さい。これはひとえにサットマリー氏のお人柄とコンサート協会の方々の誠実なお仕事ぶりや当リサイタルの成功に対してのホールのご好意と思う。周囲の方々のご支援が、また会員一同の協力が偶然と幸運を結びつけてくれたのである。

最後に、素晴らしいサットマリー一家をご紹介下さり、成功のための数々のアイデアを授けて下さった宮本典子会員、お世話して下さい下さった大阪コンサート協会の方々、そして無事にリサイタルが終わるまで共にお付き合い下さり、親クラブとして力強く支えて下さった大阪Iクラブの皆様方に心より厚く御礼申し上げる。

10月25日夜遅くお義理でチケットを買ってくれた音楽に全く縁も興味もなかった知人より電話があった。「何だかよくわからんが最後の曲聴いてたら、ジーンとして涙が出て来てん。いいもんだねえ。ありがとう。」知人はこの頃クラシック音楽にはまってしまったと聞いている。



## わ し りレー・エッセイ 福祉と共に歩みて

私共の法人、百丈山合掌会は昭和39年10月に社会福祉法人として厚生省より設立認可されました。社会福祉事業法は昭和26年「社会事業法」に代わって各種福祉事業の共通的基本理念と趣旨を明確に掲げ、事業が公明且つ適正に遂行され福祉の増進に資するため制定された法律です。因に急速な高齢化社会の到来に伴い多年に亘って尽くしてきたお年寄りに対する関心と理解が深まり、新たに老人福祉法は昭和38年に制定されました。私共の老人ホームはその翌年認可された法人を基盤に、まず最初に昭和41年5月に身寄りが無く又何らかの事情で家族と同居困難なお年寄りに老後の安らぎと生活の場を提供する目的で、自分のことはある程度自身でできる比較のお元気なお年寄り〔原則として60歳以上〕が利用出来る軽費老人ホームを創設致しま

川嶋 妙香



した。それ迄は何人かのお年寄りが各室相部屋で生活していたのを改善し、各自プライバシーを保持出来る個室に、その頃は未だ余り普及していなかった水洗トイレと簡易流しを、また冬は暖房の設備がある画期的な老人ホームでした。約30年後の現在では老人ホームでの個室はごく当然に考えられていますが、その当時では各室水洗トイレまで設備されたホームは未だ珍しく、おそらく日本で最初だったのではないかと思います。昭和50年には入居者の高齢化に伴い介護を必要とする重度のお年寄りでもお世話出来る近代設備の完備した特別養護老人ホームを設置、更に翌年4月には診療所の業務に加え、昭和58年には定員50名を70名に増員すると共に短期間お預かりするショートステイも始めました。言うまでもなく

福祉事業は公益法人であくまでも営利事業ではなく法律に依って規制を受けており、設置者は施設の設備の規模、構造、被援護者などに対する処遇について必要とされる最低基準を遵守しなければなりません、私共の施設、合掌荘はお年寄りがより一層質の高い明るく延び々びとした快適な日常生活を営んで頂けるように常に基準を大きく上回るスペースを確保し、施設の充実を図ると共に、環境の整備にも心血を注いでまいりました。

立地条件も今は人里離れた寂しい所ではなく住宅街の中央に位置し、その上風光明媚な丘陵地で河内平野を眼下に、商都大阪市が一望に展ける緑豊かな自然林を背景に、その中央には紺碧のなか空高く悠然と地上25mの白亜の御仏舍利塔が聳えています。自然環境を大切に、将来はこんもりと茂った樹木と四季折々の草花が咲き競う憩の場に余生を安らかな気持ちで過ごして頂けるように日頃から計画、配慮しております。

当法人、百丈山合掌会では老人ホームの運営のほか心身障害者の為の作業所を平成5年に、それ迄無認可で関係者の善意と協力の下に細々と行っていた事業を、正式に認可作業所として始動致しました。主に地元の療育自立センターを卒業しても受け入れ先の無い障害者が「仕事をする喜び」、「仲間と共に社会参加出来る喜び」、「自立に向かえる希望」、を持ってその多くの訓練生達は重度の障害を乗り越え、生き甲斐のある社会づくりへの熱意と期待を担って頑張っております。

今後の課題と致しましては、施設は地域により深く根ざし、長年培ってきた経験と機能を在宅の要介護者に目を向け、自立と家族支援を支えるケア、地域での生活を重視し

たケアシステムを確立していかなければならないことです。その目的に応えるため現在平成8年度の事業計画として、デイケアセンター、在宅介護支援センター、ヘルパーステーションを創設するため厚生省に申請書を提出しております。その他、障害者が家庭的な温かい雰囲気の中で、ごく普通に自立した生活が営める小規模単位のグループホームも検討、試案中ですが、何れに致しましても一つの事業を興す迄は地元住人との調整や同意書の問題で解決しなければならない難題が跡を絶たず、施設を建てるだけでも大変なのに、その上運営がスムーズに捗るか日々悩みが絶えない雑務に追われています。しかし福祉に携わるということは人間的な心のふれ合いを大切にしながら人々の自立、自助を共に支えていく人間相手の貴重な体験を積むことであり、この仕事を通して自分自らも支えられているように思います。福祉の基本的理念も社会の推移と共に年々変革が求められ、特におそらく来年度から導入されるであろう介護保健をめくり、社会保障全体の見直しが迫られており、もはや福祉はごく限られた一部の人々の拘わるものではなく、社会一般すべての人々が共通して取り組まなければならない課題であり、利用者や家族の側に立った視点から必要に応じて選択出来るケアが重要視されてきています。

特に現代の高齢化社会にあっては全ての人々が高齢に拘わる深刻な諸問題を抱えており、たとえ障害を持った人でも共に支え合い充実した自由な生き甲斐のある自立した社会生活を、如何に有意義に送ることができるかの心遣い、配慮を模索することが福祉に携わる者に与えられた大切な使命だと考えております。

## 京都I創立30周年記念式典訪問記

広石 恭子



晩秋とは思えぬ暖かく穏やかな11月13日、京都I創立30周年記念式典に出席させていただきました。

都ホテル葵殿は歴史の時代絵巻がスタンドグラスで彩られ、傍らに東山を望む華やかな式典にふさわしい会場でした。30周年事業報告、パリIクラブとの友好クラブ締結式が行われ、金剛流宗家の高砂の舞がおごそかな雰囲気の中、式典を祝いました。

はるばるパリからの5名のお客さまも、古都の伝統と風格を満喫されていたようです。初めて耳にしたショランケ国際会長のスピーチは、柔らかに穏やかなお声で、ゆったりと美しい英語でした。会場を退出される際にも、拍手でお送りする日本各地のメンバーに握手の手を出され、それは暖かくふくよかな掌でした。

その後、会場をかわり、豪華な宴が始まりました。次々と供される目にも舌にも美しいお料理に感動し、きらめく光にゆれるワインに誰もが頬を染めていました。

偶然また同じテーブルとなった、別の式典でお顔見知りになった他クラブの方々とも再会を喜びあい、懐かしく会話に花が咲きました。デザートを楽しむ頃には、リズムカルなマリimbaがアジアの音楽を奏で、オリエンタルな響きに会場は酔いしれました。そして何より印象に残ったのは、パリIゾンタクラブのメンバーがステージに上り、京都Iゾンタクラブのメンバーと共にフランス語で“アヴィニオンの橋の上で”を楽しく合唱されたことです。もちろん我々も各テーブルで共に歌い、会場が一体感に包まれた瞬間でした。

和やかな雰囲気の中お開きとなりましたが、実際に出席してみて感じたのは、何よりもまず時間とエネルギーを使って自ら参加してみるということです。各地のメンバーそれぞれが多忙な中、着実に活動を続けているのが肌で感じられるのではないのでしょうか。佳き日でありました。



福井駅に降り立つと、どしゃぶりの雨だった。車で一路会場へと向かう。暮れはじめた福井の街、冷たい雨と晩秋の風の中、なんとなくもの哀しい気分誘われて訪れた記念式典だったが、福井の会員の方々の温かいおもてなしに、大都会では味わえない地方都市ならではの心の充足感を覚えた。前日訪れた地区大会の国際色豊かな場面も、ゾンタならではの華やかさがあったが、福井では、メンバーシップという言葉が、そのまま素直に受けとめられる家庭的なぬくもりがあった。又、シヨランケ国際会長、板東ガバナー、原エリアディレクターも参加され、地元の知事はじめ来賓の方々も交えての豪華な式典であった。創立10周年を記念して、台湾の新竹クラブとの姉妹締結調印式も行われ、台湾からも18名のゾンシャンが参列され、会場を一段と盛りあげて頂いた。ソウルの地区大会の折にAmy Lai副ガバナーのご紹介で交流が始まったと伺っている。福井クラブは、ユニフェムや盲導犬医療寄金など、長期的展望を持って地道に確実に

10年の歩みをされ、改めて継続の素晴らしさに敬服した。又、地元の精神薄弱者更生施設（自閉症成人施設）すだちの家に、トヨタ・ハイエース・ワゴンを記念としてご寄贈された。日頃は社会に閉ざされている方々にとって、何よりのプレゼントになることと思う。地域に根ざした活動の重要性も改めて認識した。

私達のクラブも、まだまだ先と考えていたが、今の一步一步が10年の歩み、20年の歩みにもつながるのだから、おろそかにはできないと反省させられた思いがする。日帰りの参加だったため、会員の皆様と親しく交流できなかったことと、アトラクションで井関真人さんの百万本のバラが聞けなかったことが、ちょっと残念だった。



## こんな女に誰がした

鈴鹿 有子



大阪生まれの大阪育ち（布施）で、生まれた産院とも300メートルの距離である。両親と猫一匹の小家族。以前は蛇をペットにしていた。父は歯科医、母は専業主婦、兄がひとりいて、独立し東生駒で歯科を開業している。両親に厳しく育てられたせいか、その反動で規則というものに常に反発を感じて生きてきた。

現在、大阪北通信病院耳鼻咽喉科の部長で、専門は聴覚とめまい。毎日午前中は外来診察があり、週に2日は手術で、1日は大学で講義と予約診療を担当する。家で夕食を食べるのは週末だけで、予定外に早く帰宅すると、説明に難儀する。

関西医科大学を卒業後、高知市民病院、ロンドンで語学研修、京都の男山病院、米国ハーバード大学耳鼻科、英国リバプール大学熱帯医学科、ジュネーブのWHO本部事務局の難聴予防科を経て今日に至る。一見華やかな経歴ではあるが、引っ越しの手間も並大抵ではなかったし、別れも出会いも数々あったが、今や痛みはすべて忘れた。タイやインドで難聴調査をした数カ月の思い出などは宝

石のようだ。生活体験の豊かさと、種々の環境への順応性に優れている点に比例して、常識の所々の欠落と、行儀・作法の悪さも水準を上回る。敬語や女言葉の曖昧だったアメリカは、それはそれは私にとって心地よい場所だった。日本人の良い所、悪い所を知った上で、ああ日本人に生まれてよかったと安堵する。人は悲しいけれど、生まれながらにして決して平等ではないと思っている。健康にしてもそうなので、運命に逆らってもどうせ勝てない気がする。

好きなことは、寝ること、ひとり旅、お料理、宴会（ドンチャン騒ぎ）、買い物、野球、ジャズとラテン音楽。嫌いなことは、早起き、寒さ、濡れた道、喧嘩、不甲斐ない男と貯金。スポーツは水泳、ダイビング、スキー、ゴルフ、ハンドボール、バトミントン。感受性の閾値が低く、異常に驚いたり、おかしかったり、悲しんだりする。涙といびきが同時に出るタイプ。

ZONTAに属した第一の目的は、自分自身の洗礼です。愛称：スージー

## 編集後記

忙しい中、それぞれが個性あふれる原稿をおよせ下さったことに深謝。クラブ広報誌の意義・役割は何？と自問自答しながらの編集作業。誌面作りに“ゆとりと変化を”と企図しつつ、未達成に終わった点を反省。皆様からのご意見やアイデアをお待ちしています。